

p̄yr (n) (ウンブリア語、ドイツ語も同様)と異り、活動的な「火の神」をも示していた。これに対して、(n)は、真に物質として把握されていた。

## 「ニーベルンゲンの歌」の悲劇性とハゲネ

運命からの逃避を死以上に嫌い、運命のほの暗い深淵をのぞきながらも、この押え難い力の前に、己れのすべての苦悩と死とを深く甘受するゲルマンの民族性を、素朴な言葉と力強い表現で、余すところなく描きあげている「ニーベルンゲンの歌」に――9516行にも及ぶこの叙事詩に数々の英雄や女傑が立ち現われるなかで、その性格のニュアンスとその行為の意義において、またそのゲルマン気質の現われにおいて、ひいてはこの国民的叙事詩に英雄の心の機微と死の旅への契機を与えている人物ははたして誰れであろうか。

この長編の英雄叙事詩は、ブリュンヒルトのクリエムヒルト及びジーフリットに対する復讐を重臣ハゲネが為し、クリエムヒルトのハゲネに対する復讐をクリエムヒルト自身がなし遂げている。この二つの復讐を軸として筋は劇的構成をなし、悲劇的破局への高まりを辿つてゆく、復讐が――裏返せば、主君の妃に対するハゲネの忠誠心であり、夫に対するクリエムヒルトの広い意味での貞節であるが――復讐を招いて、ブルゴンドー族の全滅に至る過程で、極めてその性格が複雑で深みに富み、その行動が果敢でしかも思慮深く、筋の展開の推進力となつてゐるのは、グンテルの臣下ハゲネである。ハゲネこそこの叙事詩の悲劇性が高まれば高まるほど、その性格と行動に重みの加わつてくる人物は外にない。

ジーフリットはニーデルラントの王子として高貴に生まれ、高貴に育ち、武力においても礼節においても彼に優る者はなく、戦争に立てば常に最大の手柄をたて、人を疑う邪心も持たず、妻を心からいつくしみ、明るく素直な一本調子の英雄として描かれている。生き味の人間としての魅力を欠いている。彼は完全無欠なのである。それだけに彼は罪の意識のないまゝに二つの罪を犯してニーベルンゲンの禍の元凶を作つてしまう。つまり、ブリュンヒルトは三つの競技において彼女を打ち負かした勇士とのみ結婚することとしていたが、グンテル王を彼は助けてブリュンヒルトを負かしたと、他の一つは夫となつたグンテル王と床を共にしようとしないうちにブリュンヒルトを欺いたのである。止せばよいのに彼は妻クリエムヒルトに第二の事件のいきさつをもらし、その証拠の指輪と腰紐を

与える。このことがクレムヒルトとブリュンヒルトの争いの契機となり、結局は彼の暗殺へとつながっていく。事の重大さを考えぬジーフリートの単純さがさらけ出されている。猜疑心を抱かぬ単純な性格だけに、グンテルとハゲネによる暗殺の奸計に簡単にのつてしまう。

ハゲネの主君にあたるグンテル王はきわめて優柔不断で気弱で、依存心が強く、その言動に力がかもつていない。およそ王らしい決断力をもち合わせていない。家臣、特にハゲネにその主体性を骨抜きにされている。たとえば、ニーデルラントの王子ジーフリトがはじめてブルゴントの国を訪ねて一戦を交えそうな気配になつたとき、「ハゲネがこれまで無言でいることが王には不満だつた」(119)〈以下引用文は相良先生訳〉とある。このグンテル王は更に、二重に恩義のあるジーフリトをなきものにしようとするハゲネの陰謀を押し留める王らしい決断力を発揮せず、渋々ではあるが、承知してしまう。ここにグンテル王の傀儡的要素は極まつた感がある。その上、死のフン族の国への旅立ちの際にしても、断固たる決意があつたわけではなく、ハゲネの進言を押し切つてはいるが、単純に妹クレムヒルトの好意を信じるという戦国の王らしからぬ思慮の浅さを見せている。

グンテル王の妃ブリュンヒルトは美貌は衆人にすぐれ、武力にあつては勇士らをなぎたおす女傑であるが、この叙事詩の作者は彼女の人格描写にさほど意を払わず、クレムヒルトの敵役として、ジーフリト暗殺へと筋を展開するための具として登場させているきらいが見受けられる。このことを裏付けするように、ジーフリト暗殺以後はこの叙事詩から忽然と姿を消し、奇妙なことだが、クレムヒルトの怨恨と復讐の対象となつていない。いずれにせよ、この詩のテーマから見れば副人物に過ぎないと言えよう。

一方クレムヒルトは全編中いたるところに登場し、作者は深く意を払い、人物像も明確にして立体的に描き出されている。五月に咲き出ずる花のように美しく、はじらいを知る好ましい乙女である。しかし、夫ジーフリトの暗殺後は復讐の鬼と化し、他の一切を犠牲にして復讐の秋を待つ。フン族の王エッツェルとの再婚への決意にしても、〈貞節な妃は考えた。「私ははじめに女だけれど、こんなにたくさんの味方を手に入れた以上、世の中の人にはなんとでも言いたいように言わせておこう。いとしい夫の復讐ができさえすれば、そんなことはなんであろうか。」(1259)〉となつている。復讐の一念のために、ジークフリートとの間に生まれた子も見捨て、エッツェル王との間のわが子をも見殺しにする。ハゲネひとりを討つためには彼女の兄弟の死をも辞さないすさまじさである。

母系に結婚などしたくないと言い張る若い乙女の不安と期待の入りまじつた感情、はじめてジーフリトに逢つたときのはじらい、ジーフリト暗殺後の悲嘆——このクレムヒルトを作者は、前

述の三者とは違つて、実に詳しく明確に肉付けしている、しかし後半では夫の復讐への道をいちず  
に辿る女性として位置付けている。復讐の念は強まることこそあれ、弱まることは決してない。

さて、冒頭に述べた「運命からの逃避を嫌い、運命の手の中に敢然と飛び込んでいく」主体性を  
有しているのは、まさしくハゲネである。ハゲネこそクリエムヒルトの復讐の手の中へと、死の運  
命へと自らの意志で進んでゆく唯一の人物である。

ブリュンヒルトとクリエムヒルトの不和 —— ハゲネによるジーフリートの暗殺 —— クリエムヒ  
ルトの復讐の決意、この終生変わらぬ決意に立ちむかつてゆくハゲネの姿を以下見てゆきたい。

エツツエルの国からブルゴントの国へ饗宴の招待の使者が差し向けられ、＜フン族の人々は宿舎  
に赴いた。富貴なる国王は使いを走らせて一族を呼び出した。気高いグンテルは、この一件をどう  
思うか、と家臣にたずねたのに対し、あまたの者の意見としては、国王は当然エツツエルの国に赴  
かれるがよい、というのであつた。そこに居合わせた主だつた人々はそう勧めたが、ただハゲネだけ  
はひどくそれを厭がり、ひそかに国王にいつた。「それはあなたご自身に戦いを挑むというもの。  
我々が何をしたかは、あなたも篤どご承知のことです。我々はいつ何ときでもクリエムヒルト殿を  
警戒せねばなりません。私があの方の夫をこの手にかけて殺したのですから。どうしてのこのこエ  
ツツエルの国へなど行けましょう。」すると高邁なる国王がいつた。「妹は恨みを捨てたのだ。あ  
れは当国を立ち去る前に、優しく口づけして、我々の曾ての所業をゆるしたのだ。それともハゲネ、  
おぬし一人だけ、敵意を抱いているというなら別の話だが、」「フン族の使者が何と申そうと、」ハ  
ゲネが言つた。「だまされてはなりません。もしクリエムヒルト殿にお逢いになつたら、あなたの  
命も名誉もないものとなりましょう。エツツエル王の妃は、なかなか執念深いお方ですから。」こ  
の意見に対して、王弟ゲールノートがいつた、「おん身がフン族の国にいけば命がないと恐れるの  
ももつともだが、それだからとて妹に逢いにいかないというのも、それは甚だ工合のわるいことであ  
らうが。」王弟ギーゼルヘルも、勇士に対していつた。「おん身は身に覚えがあることゆえ、ハ  
ゲネよ、この地に留つてわが身を大事にかばうがよい。だが勇気のある武士は、わたしたちと一緒  
に姉上のところへ行つてもらおう。」するとトロネグの勇士は惻然として怒つた。「私以上にフン  
族の宮廷へゆく勇気のあるものを旅路にお連れになることなどはあり得ません。どうしてもおやめ  
にならないからには、私の勇気のほどをお目にかけましょう。」(1457-1464)＞つまり、  
招待の意図を看破しクリエムヒルトの復讐を警戒してフン族の国への旅立ちに反対するが、勇なき  
者と皮肉られて旅行きの決意を固めている。しかし更に用心深く、＜ハゲネが言つた。「どういふ結  
果になろうと、そのため私の言葉を悪く思わないで載しましょう。私は真心からお勧めいたします  
が、フン族の国で身を護るためには、武装を整えてお出かけなさいまし。どうしても思い止まれ

ないなら、見出せる限りの、或はお持ちになる限りの最善の郎党を召集なさいませ。私はすべての中から精鋭の騎士千名を選びましょう。そうすれば邪念を抱くクリエムヒルト殿も手出しはなさりますまい。」>と戦いの準備を勧告し、しかもその上、フン族の使者を国元へ帰らせる時期を延ばすようにと勧めている。「私は恐怖のために左右されはしません。行こうと仰しやるならすぐ支度にお掛り下さい。私も甘んじてエツツエルの国へお供します。」と、ひとたび旅立ちを決意したハゲネはもうそれをひるがえすことはしない。

こうして勇しいブリゴント勢は旅に出た。そこで国内には大きな動揺が起り、山々のあなたに男も女も泣く声がきこえた(1522)。トロネグのハゲネは先頭に立つて馬を進めた(1526)

一行はドーナウ河畔に達し、ハゲネが渡し守を探していると、たまたま水を浴びている仙女たちを見つけその衣を奪う。すると水の精のひとりが言った。<「あなた方は、恙なくエツツエルの国へ著かれます。私はこの場で真心かけ保証しますが、どんな国へも、勇士たちが、これほどの誉れをになつて訪れたためしはないのです。ゆめゆめ疑つてはなりませんよ。」この言葉に、ハゲネは心中大いによるこんだ。そこで彼はためらうことなく、水の乙女らに衣を返しあたえた。乙女らはその不思議な衣を身にまとつたのち、エツツエルの国への旅について、真実のことを告げた。ジゲリントという別の水の乙女が言った。「アルドリアーンの子ハゲネ様、私はあなたにご注意しますわ。私の叔母は今、衣がほしいものだから嘘をついたのです。あなたがフン族の国へ行つたら、とんだ目にあわされますよ。さあ、引返しなさいな。今が分れ目よ。あなた方、勇しいお武家さんたちがエツツエルの国に招かれたのは、むこうで殺されるためなのです。あそこへ行く人は、死神について行くようなものだわ。」するとハゲネが再び行つた。「そちたちは用もないのに人をたばかりおる。我々が人に憎まれて、みんながあの地で命を落すなどと、どうしてそんな馬鹿なことがあろう。」そこで水の乙女たちは、いつそう詳しく事柄を説き明かした。一人の乙女が重ねていつた。「王室の司祭ひとりを除いて、ほかにあなた方誰も生きて帰れないことは、ちゃんときまつていることなんです。それはよく分つています。司祭さんはきつとグンテル王の国に帰れるんですから。」(1537~1542)>こゝで見落してはならないのは、偽りの予言に対してハゲネが心中大いによるこんだことである。勇猛なハゲネの固い決意と自信に満ちた行動の中にも安寧への一沫の希望が見られる。豪勇の心の機微を垣間見る思いがする。更にハゲネは水の精たちの真実性を確かめるために、司祭を水底へ突き沈めるが、無事に司祭は元の岸へかえり着く。。それによつてハゲネは水の乙女の占いが避け難い運命であることを悟つたのであつた。彼は思つた。「これからの勇士は滅びなければならない」(1580)

そこで、ハゲネは運命の不可避を知ると、<三人の王の家来が船の荷をおろして、積んであつたものをすべて運び終えたとき、ハゲネは船を打ちくだいて、それを流れに投じてしまつた。猛く殊勝な武士たちは、それを見ていたくあやしんだ。「兄上、どうしてそんなことをなさるのか」とダンクワ

ルトが言つた、「フン族のところからラインへ帰るときに、どうして河を渡るつもりなんですか。」するとハゲネが、二度とそういうことはあるまい。と答えた。トロネゲの勇士はなお語つた、「我々の今度の旅路で、臆病気を出して逃げて帰えるような卑怯者があつた場合、そういう輩はこの河で死ぬ死を遂げる方がよいと思うので、こうやつておくのだ。」(1581~1583)文字通り背水の陣の覚悟で死の国への旅を続ける。彼ら一行はベツヒエラーレンに到着し、ハゲネは辺境伯夫人より楯のみを貰い受け、他の一切の引出物は辞退する。彼一人戦さの準備を進める。

エツツェルの城に近づくにつれて、ハゲネはますます好戦的・挑発的言動が多くなる。たとえば、途中まで迎えに出たディエトリーヒから、クリエムヒルトは今だにジーフリットの死を歎き悲しんでいると聞くと、<「あの方はいつまでなりと歎かれるがよい。」とハゲネはいつた。「勇士はずつと昔討たれて死んだ人だ。妃はフン族の王をこそ愛されるのが当然で、ジーフリット殿は二度と戻つてきしはしない。とうに葬られているのだから。」(1725)>また、エツツェルの城に到着してすぐさまクリエムヒルトと激しい口争いを始める。城にはいつて後もフォルケールと二人で歩哨に立ち、クリエムヒルトに対して媚を送つて和解をしようなどとは一切せず、却つて、夫ジーフリットを討つたのは自分で、復讐の意があるなら思うようにするがよいと堂々と挑戦している。

以上見るように、ハゲネは運命から逃れる術はないものかとは一度も考えてもみない。こうして悲劇的な戦いは始まる。ハゲネはクリエムヒルトとエツツェル王の間にできた王子の首をはね、和議をもしりぞけ、死へ行き着くまでは決して到底勝目のないこの戦いを止めようとはしない。己れの運命の赴くまゝに突き進んでいく。

「ニーベルンゲン之歌」の悲劇性は勿論両族の全員の死滅によつてその極みに達するのであるが、ゲルマン民族の運命への従順性の観点から主要人物の言動を考察すれば、グンテルやその他の人物は受動的な動きしかしておらず、運命の手の中へ自らの意志でとび込んでいくのは、つまり死なざるを得ないのだという明確な意識のもとにいるのは、ハゲネひとりである。クリエムヒルトの復讐の念を基盤として、その上で縦横に動いているのはハゲネである。ハゲネのこの動きが推進力となつてこの叙事詩の悲劇性は形成されていく。ハゲネの言動こそが能動的に筋の展開に参与し、運命を不可避なものとして突き進んでいくゲルマン民族の姿をもつとも鮮かに示している。

(完)

## アフガニスタン調査の記録から

東洋史 伊 東 隆 夫

アフガニスタンの面積は、日本の1.7倍といい、その総人口は、1300万とも、1400万ともいわれている。広い国土の中で、遊牧生活を余儀なくされているものも多いし、かつ女性には戸籍が